

《巻頭言》

## 創造的維持

中村 隆志

2017年4月、新潟大学に創生学部が誕生した。創生学部は、課題解決型学修を旨とする新しい学部である。

が、課題解決型学修という考え方は新しいものではなく、むしろ、歴史がある。

アメリカ合衆国やヨーロッパの近代教育思想を原典として、児童・生徒・学生の主体性、能動性を重んじる教育方法は、国内では、1910年代から1930年代にかけて「大正新教育運動」として展開されるようになり、主に当時の師範学校附属小学校などで様々な実験的な取り組みが行われた。当時「新しい」学修スタイルは、様々な試みをしながら継続したが、しかし、長くは続かない。この挫折は、

「第2次世界大戦前の社会情勢に押されて、廃止に追い込まれた。」

と説明されやすい。果たしてそうだろうか？戦争前夜の社会的混乱のせいなのだろうか？と疑いの念をもってしまう。無論、根拠があるわけではない。しかしながら、現在、課題解決型学修を継続する環境を如何に整えていくか、が、創生学部、ひいては新潟大学が真摯に取り組むべき「課題」になっていると考えさせられる。創設するよりも、継続することの方が、想像力と創造性が必要な場合もある。

将来を不安視するような言になってしまったが、それでもなお、大学という教育機関の中で、成長過程の学生にこそ、広がる自由度が与えられるべきだと考える。主体性や能動性こそが、最も尊ばれるべきものであり、尊ぶ過程もまた、継続し、受け継いでいくべきだからである。新潟大学創生学部は、この思想を貫くべき機関である。2021年春に創生学部は完成期を迎えたが、ここから、創造的に維持する、という考え方を、改めて重視する必要があると思われる。